小さなサンタ=クロース

ひらひらセネガの羽

香山彬子・作　杉田 豊・絵

小さなサンタ=クロース

ひらひらセネガの羽

香山彬子・作　杉田 豊・絵

913
香山彬子
ひらひらセネガの羽
講談社　1982
158p　22cm（児童文学創作シリーズ）
かやま　あきこ

ひらひらセネガの羽

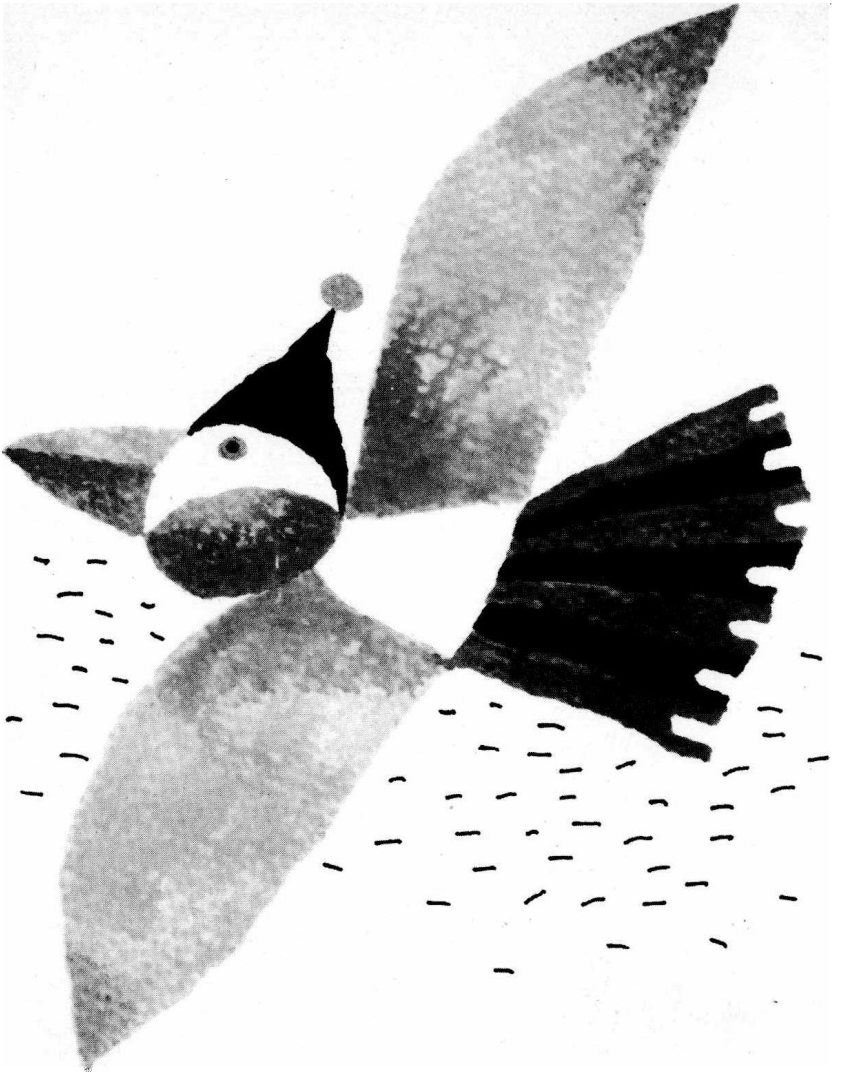
昭和57年12月10日　第1刷発行

定　価　880円
著　者　香山彬子
発行者　三木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112
電話　東京03(945)1111(大代表)
振替　東京8-3930
印刷所　株式会社　廣済堂
製本所　藤沢製本株式会社

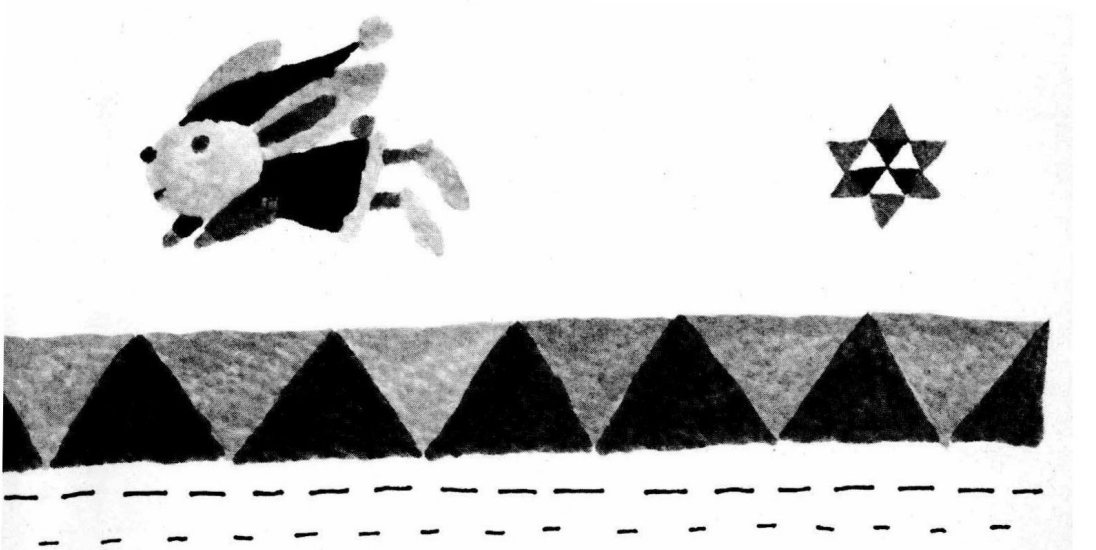
© Akiko Kayama 1982　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は，ごめんどうですが，小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-119063-6（0）（児一）

もくじ

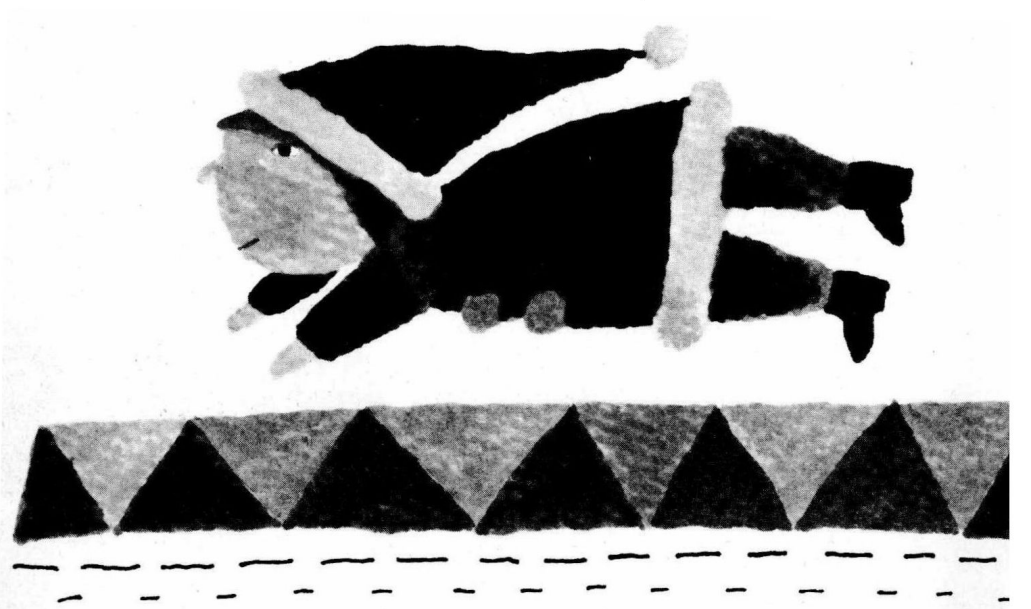


I もうすぐクリスマス
1 ジジにかかった電話……4
2 ジジ、おさびし島へ……13
II ひらひらセネガの羽
1 大魔術師クルソスコフ……21
2 ヒゲリュウスおじいさん……32
III 空とぶハレルヤ号
1 ジジは小さなサンタ＝クロース……41
2 じゃこう子うさぎのハネコ……50
IV 小さなサンタはいそがしい
1 常夏の満月島……60
2 東京のうさぎおかの家……69



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V ジジは、おおよわり
1 らくださばくの国まで……80
2 パン王子さま大すき……89
VI うさぎ山のうさぎ荘
1 ハネコはおおぐらい……99
2 うさぎはくしゃくのトト……108
VII こだま山のふかい雪
1 おいしいクナッペ菓子……119
2 とんださいなん……129
VIII すばらしいクリスマス
1 うるわしのアルカディア……138
2 サンタ＝クロースのいのり……148

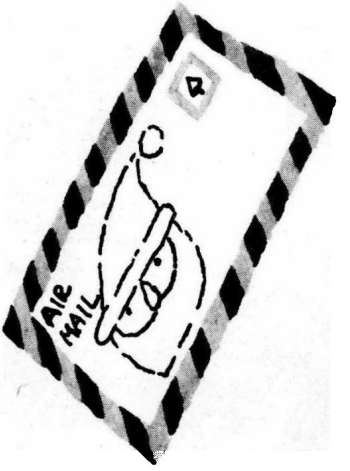


I　もうすぐクリスマス

1　ジジにかかった電話

いよいよ、クリスマスがまぢかになって、サンタ＝クロース島にも、雪の季節がやってきた。

・サンタ＝クロース島は、サンタ＝クロースたちが仕事をする島だ。クリスマスがちかづくと、サンタ＝クロースたちが、まわりの島々から、サンタ＝クロース島にやってくる。この島には、世界じゅうの子どもたちから、たくさんの手紙がとどく。サンタ＝クロースたちは、子どもたちの手紙を読んで、そのねがいごとを、できるだけかなえてやりたいと、みんなで手わけをして、世界じゅうをいそがしくとびまわる。



サンタ＝クロースのヒゲリュウスは、サンタ＝クロース協会の会長で、年よりのサンタ＝クロースだ。ヒゲリュウスは、ことしも、サンタ＝クロース島に、はやくからやってきて、仕事にとりかかっていたが、クリスマスちかくなって、かぜをひいて、ねこんでしまった。かぜがやっとなおったとおもったら、こんどはひどい神経痛にかかって、仕事ができそうもない。そこで、ヒゲリュウスは、かわいいまごのジジに、じぶんのかわりの仕事をさせようと、けっしんした。

三年前に、両親をじこでなくしたジジは、ヒゲリュウスおじいさんにひきとられて、フイフイ島の村でくらしている。村のサンタ＝クロース小学校の四年生だ。クリスマスがちかづくと、ヒゲリュウスおじいさんは、サンタ＝クロース島へ仕事にでかける。だから、そのあいだ、ジジはひとりでるすばんだ。

さて、いよいよ、あと二日でクリスマスというある日の朝、ヒゲリュウスおじいさんからジジに、電話がかかってきた。

「ハロー、ハロー。あっ、おじいさん。おはようございます。かぜはいかがですか？」

ジジは、声をはずませた。
「かぜはなおったのだが、神経痛がひどくて、サンタ＝クロース病院にはいっているんだよ。」
「わあ、おきのどく。ぼく、病院におみまいにいきます。」
「ありがとう、ジジ。じつはな、わたしからジジにたのみがあるのだよ。で、あした、病院にきてくれるかい？」
「おじいさん。学校はお休みですから、きょうでもいけますよ。おじいさんから、ぼくにたのみごとって、いったいなんでしょう？」
「わたしにかわって、わたしの仕事を、やってもらいたいのだよ。」
「えっ！　ぼくが、サンタ＝クロースになるのですか。ぼく、まだ子どもなのに、サンタ＝クロースの仕事をするなんて！」
ジジは、（これはたいへんだぞ！）とおもいながらも、ヒゲリュウスおじいさんの、かわりの仕事ときいて、むねがわくわくした。

「わたしは、かぜをひいたあと、ひどい神経痛にかかってな、こしや手足がいたくて、よく歩けないのだよ。」
「ほんとに、おきのどく。」
「わたしは、年をとったので、このごろは、きつい仕事は、わかいサンタ＝クロースたちにまかせているのだが、《ゆめのプレゼント》をおくる、いくつかの仕事を、ことしもひきうけているのでね。」
「ゆめのプレゼントですって！　ことしもゆめのプレゼントを、たのんできた子がいるんですか？」
「そうだよ、ジジ。ことしも地球の五か所から、『ゆめのプレゼントをください。』と、子どもたちの手紙がとどいたのだよ。」
「わあ、たいへん！　でも、すてき！」
「だがね、ジジ。ゆめのプレゼントをおくる仕事は、なかなかたいへんな仕事でね。」
「ええ、おじいさん。ぼく、わかります。」

「それに、サンタ＝クロースたちは、だれもかれも、世界じゅうをとびまわらなければならないので、みんな大いそがしだ。だから、きゅうに、わたしのこの仕事を、おしつけるわけにいかない。それで、ジジ。わたしは、おまえにたのむことにしたんだよ。」

「ああ、ぼく、どきどきしちゃう。ぼくにできるかどうか、しんぱいです。」

「できるとも。ジジは、おとなになったら、サンタ＝クロースになるんだろ。きっと、よいけいけんになる。どうだね、ジジ。わたしの、このたのみを、ひきうけてくれるかね？」

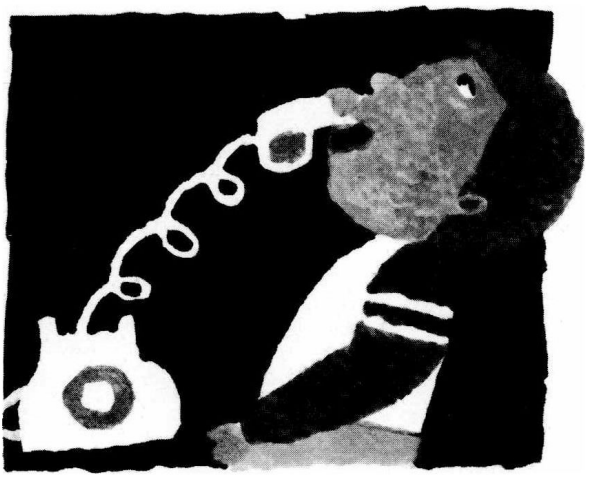
「はい。ぼく、よろこんでおひきうけします。」

ジジは、元気にこたえた。が、すぐに、ちょっと、とまどいながら口ごもった。

「で、ぼく、いったい、どんなふうに、仕事をはじめればいいのですか？」

「あしたの朝、まだ日がのぼらないうちに、おまえの特急モーターボートで、サンタ＝クロース島にきなさい。ジジは、あのボートの運転は、とくいだね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



「はい、おじいさん。ぼく、わくわくする。」
「それから、ジジ。きょうじゅうに、いろいろと、用意をしてほしいものがあるのだよ。これから話すから、メモをとりなさい。」
「はい。」
ジジは、さっそく、ヒゲリュウスおじいさんの話を、メモにかきとった。まず、用意するものは、赤いきぬの大きなハンカチーフ一まい。緑のきぬのハンカチーフ五まい。青い《花びら小石（花びらの形をした石）》を五つ。黄色い《火打ち小石》を二つ。ばらの花のオーデコロンひとびん。星香草の花たばを二つ。
「それから。」
と、おじいさんがつけくわえた。
「ここにくる前に、石ころだらけの、《おさびし島》に、よってきてもらいたい。」
「あれ？　あのさびしい無人島に、なにしによるのですか？」
「あのおさびし島に、わたしのむかしからのしたしい友だち、クルソスコフ大魔術師

がすんでいる。」
「えっ！　大魔術師ですって？」
「しっ！　大魔術師といっても、わるいやつではない。むかし、たくさんの魔術をつかったが、よいことにしかつかわなかった。」
「ぼく、クルソスコフという名まえを、おじいさんから、きいたことはありませんよ。」
「それはとうぜんだ。もう、十五年前に、いんたいしているのだからな。いいか、ジジ。おまえは、そのクルソスコフに会って、わたしのかわりに、《ひらひらセネガの羽》をかりて、ここまでもってきてくれ。」
「その、ひら、なんとか……って、いったいなんですか？」
「ひらひらセネガの羽だよ。わたしの仕事には、たいそうやくにたつのだ。わたしは、ときどき、ひそかにそれをかりて、つかってきた。」
「では、ぼく、おさびし島によって、それをかりてきます。でも、ぼく、クルソス

コフ大魔術師に、うまく会えるでしょうか。」

「クルソスコフは、魔術でかくれているので、かんたんには会えない。でも、これから、わたしがおしえるとおりにすれば、むこうから、おまえの前に、すがたをあらわしてくれる。さあ、これから、わたしがいうことを、よく注意してききなさい。」

「はい、おじいさん。」

ジジは、きんちょうして、おじいさんの話に耳をかたむけた。そして、メモにしっかりと、かきとめた。

おじいさんの話がおわって、受話器をおいたとき、ジジのむねは、はげしくみゃくうった。

クルソスコフ大魔術師とは？　いったい、どんな人だろう？　いや、人ではないのだろうか？　とにかく、大魔術師というからには、きっと、こわい顔をした大男にちがいない。それから、ひらひらセネガの羽とは、いったい、どんな羽だろう？

ジジは、むねをわくわくさせながら、すぐに、したくにとりかかった。

2　ジジ、おさびし島へ

ジジは海辺にかけていくと、さくらの花びらの形をした、小さな青い花びら小石を五つと、黄色い火打ち小石を二つ、ひろいあつめ、それから、海辺の岩地へといそいだ。

いつのまにか、雪がちらほら、まいおりてきた。ジジは、いそいで、南のがけのくぼみにまわっていった。そこには、冬にさく、星の形をした、目のさめるほど黄色い、星香草の花のひとむれがあった。

「わあ、きれい。まだ、だれにもとられなくてよかった。」

ジジは、わくわくしながら、星香草をつみとって、花たばを二つこしらえた。

家にもどると、ジジは、ヒゲリュウスおじいさんの、洋だんすのひきだしから、緑色のきぬのハンカチーフ五まいと、大きな赤いきぬのハンカチーフを一まいとりだし

た。それから、ばらの花のオーデコロンをひとびん、用意した。

さて、つぎの日、ジジは夜があけないうちにとびおき、きのう、用意したものを、バスケットにいれて、家を出た。

雪はやんでいたが、地面はうっすらと白い。まだあけないぐんじょう色の空に、星星がかがやいている。ジジは、東の波止場にかけおりていくと、いそいで、特急モーターボートにとびのり、ともづなをといた。

「さあ！　おさびし島へ出発！」

ジジは、元気よくエンジンをかけた。

ボートは、波止場からすべりでると、ぐんぐんスピードをあげた。

海は、まだ目をさましていない。海面は、とろりとしずかだ。むねがわくわくする。

ジジは、しっかりと運転した。

（大魔術師のクルソスコフって、いったい、どんな魔術師だろう？）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com